

「弟子の責務」

ルカ 17 : 1~10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①前回の箇所ではイエスは、パリサイ人たちの誤りを正すために「金持ちとラザロの物語」を語った。
- ②きょうの箇所では、再び弟子たちに向かって語りかけている。
- ③文脈の中でこの箇所を理解する必要がある。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 117 管理人についての3つのたとえ話 (16 : 1~17 : 10)

- ①不正な管理人のたとえ (弟子たちに)
- ②パリサイ人たちとの対決
- ③金持ちとラザロの物語 (パリサイ人たちに)
- ④赦しと奉仕に関する教え (弟子たちに)

(3) 今回は、④を取り上げる。

2. アウトライン

(1) 赦しに関する教え (隣人への責務) (1~4 節)

- ①つまずきを与えるな (1~2 節)。
- ②つまずくな (3~4 節)。

(2) 奉仕に関する教え (神への責務) (5~10 節)

- ①真の信仰を持つこと (5~6 節)。
- ②神に忠実に仕えること (7~10 節)。

3. 結論

- (1) 赦しに関するまとめ
- (2) 弟子の自己認識

クリスチャンの責務について考えてみる。

I. 赦しに関する教え (隣人への責務) (1~4 節)

- 1. つまずきを与えるな (1~2 節)。

Luk 17:1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、

つまずきを起こさせる者はわざわいだ。

Luk 17:2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

(1) 罪が支配する世にあっては、つまずきが起こることをなくすのは不可能である。

- ①「つまずき」は、ギリシア語で「skandalon」である。
- ②本来の意味は、獲物を捕獲する「罨」に付けられ木片である(餌を付けてある)。
- ③それが作動すると、「罨」が閉まり、獲物が捕獲される。
- ④この言葉は、罨にかかった獲物の行動も指す。
- ⑤ここでは、この言葉が比喩的に用いられている。
- ⑥他の人たちに罪を犯させること。
- ⑦他の人たちを、イエスから遠ざけること(信仰から遠ざけること)。

(2) しかし、つまずきを起こさせる者は、わざわいである。

①パリサイ人たちは、つまずきを与えていた。

「わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです」(ルカ 11:52)

*律法主義というつまずきである。

②金持ちもまた、つまずきを与えていた。

*物質主義、拝金主義というつまずきである。

(3) イエスの弟子たちは、つまずきの原因となってはならない。

- ①「小さい者たち」とは、第一義的には、霊的幼子たちであろう。
- ②彼らは、まだ信仰が成長していないので、悪影響を受けやすいのである。

(4) つまずきを与えることは、深刻な罪である。

- ①処罰も大きい。
- ②処罰に関して厳しい言葉が使われている。
(例話) カペナウムの遺跡に置かれている石臼
- ③婦人が手で回すものではなく、ロバに挽かせるような石臼
(例話) ロバート・シュラー博士の質問 「何を一番恐れるか」
- ④道徳的な罪、聖書の単純な意味を変更するような教え

2. つまづくな(3~4節)。

Luk 17:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

Luk 17:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

(1) イエスの弟子は、自分自身に関しては、つまりはならない。

①罪に対しては、赦しをもって対処する。

②2段階の対処法

*罪を犯している人を戒める。

*悔い改めれば、赦す。

③7度の赦しは、完全な赦しを意味する。

II. 奉仕に関する教え(神への責務)(5~10節)

1. 神への第一の責務は、真の信仰を持つことである(5~6節)。

Luk 17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」

Luk 17:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言え、言いつけどおりになるのです。」

(1) 無限に赦すことは、極めて難しいことである。

①それで弟子たちが、「私たちの信仰を増してください」と願ったのである。

(2) イエスは、より大きな信仰ではなく、正しい信仰こそ大切であると教えた。

①それが、からし種ほどの信仰である。

②真の信仰には、桑の木をも動かすほどの力がある。

③桑の木とは、いちじく桑の木である。この木は、地中に根を広げる。

④ここでは、桑の木は私たちの内にあるプライド、自我を象徴している。

⑤赦しの心がないのは、プライドや自我の問題である。

⑥それを抜き取る力は、信仰から来る。

2. 神への第2の責務は、神に忠実に仕えることである(7~10節)。

Luk 17:7 ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい』としもべに言うでしょうか。

Luk 17:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。

Luk 17:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。

Luk 17:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまった

ら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。』

(1) 忠実なしもべのたとえ話

①主人は、野らから帰って来た奴隷(自由意志による奴隷)を食卓に招かない。

*主人が奴隷と食卓に着くことはない。

②むしろ、食事の用意をさせる(少数の奴隷しかいない家)。

③その後で、奴隷は食事をする。

④主人は奴隷に感謝を表さない。

⑤イエスの弟子も、そのような心構えを持つべきである。

⑦「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」と言う。

⑧訳文の比較

「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです」(新改訳)

「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」

(新共同訳)

「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」(口語訳)

(2) たとえ話の教訓

①信仰は、奉仕を通して成長する。

(例話) 奉仕→信仰が育つ→より大きな奉仕ができる→より信仰が育つ

結論

1. 赦しに関するまとめ

(1) 他の信者から傷つけられた場合、先ず心の中でその人を赦す。

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4:32)

①赦しの心を持つことは、自分の魂を解放する道である。

(2) 次に、個人的にその人に悔い改めを迫る。

「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい」(ルカ17:3)

①マタ18:15

(3) もし悔い改めないなら、ほかに一人か二人を連れていく。

①マタ18:16

(4) それでも効果がないなら、教会にそれを告げる。

①マタ18:17

②以上のことを、愛をもって実行する。目的は、交わりの回復である。

(5) ルカ 17 : 4

「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい」

- ①「悔い改めます」という言葉が真実かどうかを吟味する必要はない。
- ②その言葉を信じて、その都度赦す。
- ③これは、天の父が私たちを扱ってくださる方法である。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(1ヨハ1:9)

2. 弟子の自己認識

(1) エペ 2 : 8~10

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです。私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです」

- ①救いも、行いも、すべて神の恵みによる。
- ②「取りに足りない僕」という自己認識こそ、信仰を育て、その人を自由にする。

(2) ロイ・ヘッション

*英国人(1908~1992)、「カルバリの道」の著者。

*「しもべの5つの特徴」

- ①数々の仕事の上にもう一つ仕事を乗せられても、自分に対する配慮がないと思わないで、それをそのまま受け入れる。
- ②その際、感謝されることを期待しない。
- ③その仕事を終えたとき、主人のことを、利己的な人だと責めない。
- ④「自分は取るに足りないしもべです」と告白しなければならない。
- ⑤柔和と謙遜への道において、自分はなにひとつ貢献していないと認めなければならない。

(3) 自己実現を求める道と、カルバリへの道とは大いに異なる。

(4) カルバリの道の先に待っているものはなにか。

「主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます」

(ルカ 12 : 36)